

外国にルーツをもつ子どもたちの学習支援

著者	柴田 隆行
著者別名	Takayuki SHIBATA
雑誌名	国際地域学研究
号	19
ページ	26-36
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008248/

外国にルーツをもつ子どもたちの学習支援

柴田 隆行*

1. 概要

「外国にルーツをもつ子どもたちの学習支援」プロジェクトの英語名称は Study support Project for International children with Real Interaction at TOYO University。この頭文字をとって SPIRIT と略称する。「外国人」と言わないのは、親の都合ないし意向で日本国籍となっているが日本語がほとんど使えない外国出身の人がいるからである。

外国にルーツを持つ子どもたちに対して、大学生が「大学」という場所で、「教科学習と文化コミュニケーション」という手段を用いて、日本語の「読む・書く・聞く・話す」力の習得と日本の文化理解を支援することを目的とする。

2009（平成21）年9月、文京区内にある NPO 法人 COMPASS の助言と支援を受け、社会学部社会文化システム学科の正規活動として出発。2010年度より学部予算を得て、教材や参考書の購入、教育機材の充実を図っている。おもな活動は、学習支援（盆と正月を除き、毎週木曜日18時30分から20時30分）、教育委員会・学校・他団体等での資料収集、ぶんきょう多文化ネットに加盟し研修や交流会等に参加、大学祭展示による活動紹介、などである。

参加学生にとっては、①多文化共生社会を肌身で感じ社会学的研究を進める場とする、②大学祭や他団体交流、報告書などで活動を紹介し、その成果を社会に還元する、③プロジェクト全体の運営を主体的にこなし作業を分担することで、学生の組織的な活動能力を養う、④教育は量ではなく質であるという教育の厳しさを学生が身につける、⑤学外団体や教育委員会などとの接触により社会性を身につける、といった教育効果が期待できる。

2014年度の参加児童・生徒は、中国14名、台湾1名、フィリピン6名、マレーシア1名、ベトナム5名、カンボジア1名、モンゴル1名、スリランカ1名、フランス1名で、男16名、女15名、合計31名であり、年齢・学年別では、5歳1名、小学1年1名、小学5年2名、中学1年3名、中学2年1名、中学3年9名、高校1年1名、高校2年2名、大学院1名、社会人5名、不明1名である。参加学生は、社会学部9名（社会学科1名、社会文化システム学科6名、社会心理学科1名、二部社会学科1名）、文学部8名（教育学科5名、哲学科1名、英米文学科1名、英語コミュニケーション学科1名）、法学部1名、経済学部1名、経営学部1名で、男7名、女13名、学年別では1年2名、2年12名、3年4名、4年2名で、合計20名である。国際地域学部からは、学生や教職員が見学に来たことはあるが、正規メンバーになった学生が残念ながらいない。校地が

* 東洋大学社会学部：Faculty of Sociology, Toyo University

離れていたこと、移転してからも、社会学部と文学部は同じ校舎を利用しており掲示を見る機会が日常あるのに対して、他学部生は SPIRIT の活動を知る機会が少ないからだと思われる。なお、担当教員は社会学部社会文化システム学科の小林正夫、王 亜新、柴田隆行（責任者）である。

SPIRIT は、5 年半活動を続けて一定の社会的責任は果たしたこと、プロジェクトは何事も 5 年単位で更新するのが望ましいこと、社会学部生の割合が減り（当初は社会文化システム学科生が 8 割いた）、学部生のための教育費をこれに振り当てる合理的根拠が薄れたこと、基本的な教材がかなり充実し予算行為をあまり必要としなくなったこと、学科の公式活動であるため他学科他学部生が参加しにくいと思われていたこと、等々を考慮し、2015 年 4 月 1 日から学生の任意団体とした。ただし、活動の社会的信用を維持するため、同時に社会学部生にとっての意義ある活動であることは変わらないこと、そして活動教室を安定的に使用できるようにするため、社会学部社会文化システム学科の公認・後援サークルとして位置づけ、学部の承認を受けている。

2. 活動内容

2014 年 3 月に卒業したメンバーが作成した「仕事マニュアル」から抜粋して、SPIRIT の活動内容を紹介しよう。

運営係：各係活動や定例活動が快適に行われるよう環境を整備すること。ちょっとした手間で大きな手間を省けるようにする。

《主な仕事》

- ・ SPIRITnews 作成（毎月最終木曜日に、SPIRIT 生徒・保護者向けの予定表を発行する。）
- ・ 土曜 SPIRIT 出欠確認、活動記録メールの配信
- ・ 木曜 SPIRIT の参加者記録ファイルの書き込み（日付、活動場所、天気、参加生徒、参加学生、参加教員、見学者を記録。）
- ・ 新規参加者・見学者対応、消耗品の買い出し、会計管理、その他の雑用

教育係：児童・生徒がより学びやすく・楽しく参加できるように SPIRIT の活動環境を整備する。児童・生徒の一番近くにおいて児童・生徒の細かな変化に気づいてあげられる存在であること。

《主な仕事》

- ・ 活動の出欠確認メーリス送信、活動当日の担当割り振り・記入用紙等の配布
- ・ レクリエーションの企画・準備・実行（日本の季節の行事に関するレクリエーションを通して日本の行事を理解してもらうことや生徒・学生の交流を図る。）
- ・ SPIRIT タイムの教材作成（生徒に日本語を音読してもらう時間の教材を作る。様々なパターンの日本語教材を作り生徒により多くの日本語に触れてもらうことを目的とする。）
- ・ 学習教材の購入、生徒の成長記録作成・共有会開催

広報係：多くの人に SPIRIT の活動や外国にルーツを持つ子どもたちの現状を知ってもらう。社会問題としてあまり知られていない、外国にルーツをもつ児童の日本語サポートや学校生活について社会に広める。

《主な仕事》

- ・ 広報活動：児童・生徒対象（文京区シビックセンターアカデミー推進課、近隣小中学校等）、学生対象（授業内広報、新入生歓迎行事、大学祭、オープンキャンパス等）
- ・ PV・チラシ作製、ブログ管理・更新、TwitterとFacebookの管理

調査係：調査活動を通じて得たことをSPIRITの活動に還元する。これまで2012年度は東京都の教育委員会、2013年度は小学校の日本語教室で調査。このような公的機関だけでなく、例えば文京区のぶんたネットの同じ活動をしている団体へ手伝いに行き、そのやり方を参考にすることも調査活動の1つ。日本に住んでいる外国籍の子どもたちについての勉強会なども、活動に直接役に立つ内容でないけれどSPIRITに来ている子どもたちを深く理解する助けになる。

《主な仕事》

新聞記事集め、外部団体・機関での調査活動、調査活動報告書作成

3. 児童・生徒の成長記録（2014年度）から抜粋

活動時に担当した学生が書く「反省用紙」をもとに作成。【1】＝学習内容や様子、【2】＝その他の備考欄。

G：中学1年女子（モンゴル）

2014年4月10日 【1】 標高や海面が理解できなかったようなので、図を使ったり文をわかりやすい日本語に言い換えたりしたらうまく理解してくれた。【2】 疑問をほとんど解決できたみたいでよかった。

2014年5月15日 【1】 他の生徒に折り紙の折り方を教えたり一緒に折ってあげたりとお姉さんの面も見せてくれた。【2】 レクを楽しんでいた。

2014年6月19日 【1】 自分で問題を2問作って解いていたが、2問ともマイナスにすべきところをしておらず、同じミスをしていた。【2】 日本語もこの3ヶ月で上達したが、学校の友達との交流を面倒くさかっていたり悩んでいたようなので、それがとても気になった。

2014年7月3日 【1】 ほとんど話していた。最後の数十分は真面目に宿題を解いていた。しかしほとんど学生に、答えを教えて！と言い、それを丸写ししていたのできちんと理解できていないように思えた。「加える」や「数」などが読めていなかった。【2】 クラスの男子に人種差別のようなことを言われ、泣いてしまったと言っていた。

AK：中学3年女子（ベトナム）

2014年5月8日 【1】 数学の小テストに向けて、小テストとほぼ同じ形式のものをルーズリーフに問題を写して解いていた。ケアレスミスはあったが解き方自体は理解しているようだった。【2】 5月下旬に運動会があるらしく、いくつか授業をつぶして練習に当てているとのこと。そのせいか、今はあまり勉強を急いでいる風には見えなかった。

2014年5月15日 【1】 因数分解で複数の数字、記号を（ ）の外に出す問題で少しつまづいていた。【2】 折り紙レクではやらない！こどもっばい！などと言いながらも楽しめていた。

2014年7月31日 【1】 was が are の過去形だと言うと驚いていた。基本的なことから確認したほうが良さそう。【2】 中学の先生がこのままでは高校に行くのが難しいと言ったようで、少し落ち込んでいた。なので塾を探し中。

2014年8月21日 【1】 数学は図形の錯角や同位角を使った問題に苦戦していた。数学の宿題はワークを写していたが、分からないところには印をつけて質問できるように準備していた。【2】 塾に通うことにするそうだが、友達関係で悩んでいるようだった。

TH：中学3年男子（中国）

2014年5月15日 【1】 6月に英検3級の試験があるそうでその対策。会話文や動詞の穴埋め問題に取り組んだ。会話文での正答率が高い。【2】 動詞の穴埋め問題では単語の意味をあまり理解していないせいか、ほとんどの答えが勘に依っていたため、正答率が低かった。

2014年6月26日 【1】 国語の読解問題では設問の意味を理解しきれていないことがあった。【2】 修学旅行新聞は楽しそうに内容を考えていた。

2014年10月9日 【1】 問題の正答率はわりと高かったが、消去法や勘で解いていることが多かった。簡単な単語の意味（スタジアムやラケットなど）もわかっていないものがあった。リスニングも苦手で、前回の試験ではリスニングで点を落として合格できなかったらしい。【2】 学校のテストでは、国英はあまりふるわなかったが、数理社は平均70点を越したと喜んでいて。

2014年12月18日 【1】 国語は文章を読んで解答する問題はできていたが、知らない語句や慣用句が出ている問題は解けていなかった。数学は表面積を求めるのを間違えて体積を求めようとして間違えてしまったようだが、それ以外は結構解けていた。【2】 後半はレクに参加し、楽しそうにクリスマスカード作りをしていた。

KT：中学2年男子（中国）

2014年6月24日（初参加） 【1】 とても真面目で、逐一メモをとっていた。日本に来たばかりなので、知っている単語は少ない。書きに関しては「う」と「え」など、形が似ているものを間違えやすい。【2】 ひらがなで示された単語を学ぶ際、漢字に変換してあげると分かりやすそうだった。

2014年7月31日 【1】 自分の言いたいことをあまり言わず、意思疎通が難しいが、しばらく話しているとぼちぼちと話し出してくれる。学習には至って真面目に取り組んでおり、周囲が少しざわついていても、あまり気にしていない様子だった。【2】 日本語は同じ意味でも言葉がたくさんあるから難しいと言っており苦戦していた。

NVG：中学2年男子（フィリピン）

2014年6月26日 【1】 日本語を聞いたりひらがなを読むことはできるが日本語を自分の言葉で話すことは難しいようだった。【2】 日本語をもっと学習したい、とのこと。

2014年7月31日 【1】 漢字はすぐあきてやめてしまったが、先週勉強したものを覚えていて、これ書いたことあると言って、練習したものをを見せてくれた。五十音はわかるようで、辞書の引き方を少し教えたらできるようになった。【2】 辞書で引くというのを繰り返していると、使い方に慣れてきたと思う。しかし、それもすぐあきてしまったので、しりとりをやったところ、おもしろかったようで、辞書で言葉を探したり、自分で一生懸命考えたりして、次につなげるものを探していた。

2014年9月4日 【1】+-の足し算はわかった。引き算、掛け算、割り算はざっと説明したが、分かりにくかったようだ。分数の計算の仕方を忘れてしまっていた。【2】辞書などを引いて分からないところなどを積極的に質問していた。

AK：中学1年男子（ベトナム）

2014年4月10日 【1】英語の教科書を先の方まで読んでいた。英語は習っていなくても読めていた。Are you --? や Do you --? の～の部分で自分で置き換え練習していた。【2】SPIRIT TIME を読んでくれた。

2014年6月5日 【1】英検は次の日だとのこと。本人も少し気合いが入っていた。単語は少し分からないものがあったので、自分でリストを作っていた。しかし、少し分かっていたものはリスト化しようとしなかった。前置詞は全体的に曖昧だった。【2】ハワイへ行ってしまう小学生時代からの友達宛の手紙を書いていた。内容は恥ずかしがって見せてくれなかった。

OS：中学2年男子（中国）

2014年4月10日 【1】書く際にひらがなの「や」と「ゆ」、「ぬ」と「ね」といった間違いが多かった。【2】中国のお土産を持って久しぶりに活動に参加してくれた。終始元気いっぱいだったが、勉強するときはしっかりと作文に取り組んでいた。

2014年9月4日 【1】図鑑を開いて、書きたいことを抜粋し、自分なりに少しずつまとめていった。「ん」を抜いて書くこと（せんすい→せすい、など）がしばしばあった。【2】基本集中して課題に取り組んでいた。

RS：中学3年男子（中国）

2014年6月26日 【1】学校では授業中寝てしまうことがあるそうだ。（漢字が読めないため。）【2】初めて話したが、うちとけてくれた気がする。

2014年7月3日 【1】まだ日本に来て1年経っていないということで、日本語の読み書きに若干不安が残るものの勉強を進めるのに支障はなかった。【2】真面目に取り組んでおり、丁寧に教えれば理解できる様だった。

4. レクリエーション記録抜粋

学生と生徒が交流できるように、今年度は毎月一回を目安にレクリエーションを行った。交流だけでなく、レクリエーションを通じて子どもたちが日本の行事などに触れることも目的として行っている。今年度は教育係の5人で各レクリエーションの担当を決め、企画・準備・実行までを行った。昨年までと違う新しいレクリエーションを取り入れることもできた。

4月：自己紹介レクリエーション

今まで顔と名前が一致していなかった人同士で交流することができた。隣の人と教え合いながら自己紹介をする姿が見られた。前は日本語ができず自己紹介をできなかった生徒も今回はできるようになるなど成長が伺えた。しかし、恥ずかしがる生徒や、大人の生徒にとっては参加しづらいレクリエーションになってしまった。

5月：子どもの日、感謝の手紙を書こう

母への感謝の手紙を書くレクリエーションを実施。なかにはお母さん宛に書きたくない（書けない家庭の事情もあるかもしれない）という生徒に考慮し、その場合は、最終的な目標は日本語を書かせるということなので、担当している学生など他の人に書くということにした。照れくさくてなかなか書いてくれない子、一生懸命お母さんに手紙を書く子、それぞれ感謝というものを見つめなおすレクになったのではないかな。

6月：3行ノート作り

SPIRIT メンバーの学生と生徒の交換日記のような感覚で日記を書いてもらうことで、ふだんの生活や悩みを相談できるようにする。また日本語の「書き」の向上を図る。日記ノートの表紙をかわいくデコレーションしようというレクリエーション。生徒同士わいわい話しながら、個性あふれるノートが完成した。しかし、この3行日記は残念ながら、生徒がなかなか書いてくれず、定着せずに終わってしまった。

10月：ハロウィンパーティー

グミを箸でつかんで、隣の皿に1分間でいくつ移せるか競うゲーム。勝った生徒にはお菓子をプレゼント。ハロウィンという海外由来のイベントと箸・豆移しといった日本の文化を融合させ、子どもたちに日本風にハロウィンを楽しんでもらうことができた。ゲームでは、学生と生徒の勝負も互角の戦いで、予想以上に盛り上がりを見せた。ふだんレクに乗り気ではない生徒も、今回は積極的に参加していた。

12月：年賀状作り

毎年恒例の年賀状作りレク。一人で何枚も年賀状を書く生徒、めんどくさくなって書いてくれない生徒がそれぞれいた。日本の風習を教える機会としては良いレクになった。やろうよと促せばなんだかんだ書いてくれるのがSPIRITの生徒のいいところ。後日、生徒からこのときの年賀状が届き、かわいい絵、コメントに微笑んでしまった。

5. 参加学生の感想

(1) 社会文化システム学科4年 小澤 舞

今年度のSPIRITは、私にとって「ボランティアとは何か」を考える1年だった。

私は大学1年から4年までこのSPIRITで外国人児童に対してボランティアを続けてきた。当初は、たんに外国人が好きで交流したい、大学生活で何か打ち込めるものを作りたいという思いでこのSPIRITに入った。困っている外国人児童を助けてあげたいという気持ちはもちろんあったが、反面入ったきっかけは自分の満足のためだったのではないかなとも思う。SPIRITを続けていくなかで、係の仕事、生徒との接し方など大変だなと思うことも多くあった。それでも続けたいと思ったのは、生徒を一人でも笑顔にしたい、何かできることがあればしてあげたいという気持ちがあったからだと感じる。自分の満足だけでなく、子どもを支えたいという思いが芽生えるようになった。SPIRITに向き合う姿勢もだんだん変わってきたように感じる。そんななか、今年度、初めて私はSPIRITの枠を超えて、SPIRITに通っている中国人生徒W君の中学校に学習支援ボランティアに

行った。中学校側から、なかなか日本語を覚えようとせず手のかかるW君の対応に困っているとヘルプの声がかかったためだ。SPIRITでも手のかかるW君、そして初めての試みだったためこのボランティアをすることに不安や戸惑いもあった。しかし、私たちSPIRITに助けを求めてきてくれたことは、私たちが必要とされているということだと感じ嬉しくもあった。ボランティアがいないよりはいたほうが確実によいだろうと考え、私は中学校に行くことにした。私たちが中学校に行くとW君は、勉強は嫌だと言いながらもとても喜んでくれた。帰り道は必ずW君と一緒に帰り、彼の日本の生活での楽しみ、嫌なことなどいろいろな話をした。異国の日本で暮らす彼の苦勞も感じ取ることができた。このとき私は、純粹に彼をサポートしたいと思った。自分にできることがあればさせてもらいたいと感じたからだ。その反面、中学校の先生が「無償だと地域のボランティアの人もなかなかやってくれる人がいない」と漏らしていたことが気になった。日本語ボランティアが存在しつつ、有償でないと助けてくれないということに現実の厳しさも感じた。

この1年間、ボランティアについて考えたが、ボランティアとは「志願兵」と言われるだけに、自ら何かできることがあればさせてもらいたいという姿勢で臨むべきなのではないかと感じた。やりたくなければ無理やりやる必要も、人に言われてやる必要もないと思う。ボランティアに向き合う姿勢は人それぞれあると思うが、私はこのSPIRITで自分なりに学んだ「ボランティア」を大切にしていきたいと思う。

〔柴田追記——W君は現在中学2年生となり、立派な体格だけでなく日本語も上手で精神的に大人になり新しく参加する児童のお兄さん役となって活躍している。〕

(2) 社会文化システム学科4年 赤坂真理

初代メンバーからの引き継ぎが始まった時から早3年が経とうとしている。この3年間、個人的には相当なプレッシャーを感じていた。3年前のSPIRITは、お世辞にも組織としてしっかりしているとはまだ言えなかったのではないかと思っている。先輩方が大きなビジョンを掲げていることに希望を見出しながらも不安が募り、進もうとしている方向に疑問を持つては当時いた同期にそれをぶつけていた。

あれから3年が経ち、自分の代が引き継ぎをする順番が回ってきた。私個人として初代メンバーから引き継いだのは、「SPIRIT」という場とそれに対する想いくらいである。そこからSPIRITの多くの中身を作ってきたのは、2代目・3代目に牽引してもらいながら活動してきた人数の多い4代目の私達であるといっても過言ではない。良くも悪くも、SPIRITは4代目のカラーに染まったのではないだろうか。

しかしこのようななかで、私は年々大切なものが失われてきているのではないかと考えている。それはSPIRIT設立メンバーの想いや現在に至るまでの苦悩である。企業であっても学校であっても、設立に関わった人々の想いがその後その組織の理念となっていることがほとんどであると就職活動から学んだ。確かに成長していくにつれて、柔軟に変えていかなければならないことも多くあるだろう。そしてその「成長」という変化に携わってきたのが、私達である。だがその「成長」に携わることができたのは、一時活動休止に追い込まれながらも、復活させてくれた先輩方の努力があったからこそではないだろうか。今年度の学生メンバーのなかで、初代メンバーと活動してきたのは4人しかいない。それだけに先輩方の想いを尊重しようとする言動を受け入れてもらえにくい

状況にあったと感じている。この状況に歯向かおうとして、何度も向きになってしまったこともあった。それは私が、初代メンバーと活動することができた最後の学年の4人のうち1人であり、そして何よりも歴代のメンバーのなかで最も SPIRIT に携わった時間が長いメンバーであるからである。そのため、5年目という節目を迎え、初代と関わった人がいなくなり本当の意味で新生 SPIRIT になる今こそ、改めて SPIRIT の設立の経緯やそれに関わったメンバーの想いを考え、引き継いでいって欲しいと私は後輩たちに伝えたい。〔以下略〕

6. 参加児童・生徒の声

参加している児童・生徒に SPIRIT について感想を書いてもらおうとしても恥ずかしがったり面倒くさがったりしてなかなか書いてくれないが、見学者や取材で来る人には答えてくれることがある。ここでは、TBS ラジオの「土曜朝イチエンタ。堀尾正明+ PLUS！」で2014年2月22日に放送されたレポートから担当の楠葉絵美氏が聴き取った話を引用したい。(表現は語られた通り)

女性：スピリットに話しすることは楽しいです。学校の日本のクラスよりリラックスも出来ます。

男の子：楽しいです、みんな笑顔で良いです。日本語や学校の宿題などをいろいろ解決出来なかったところを解決出来たりします。

女の子：中学2年生です。楽しいです、気軽に何でも話せるっていうのが、毎週来るのが楽しみです。年上だからこそいろいろわかってもらえて好きです。相談に乗ってもらって、そうすればいいのかってアドバイスもらいながら学校の生活も生かしてやっています。もし出来たらこの大学入ってまたスピリットに、お姉ちゃん達みたいになりたいっていうのが今夢です。

「僕はじっくり解くタイプだから、時間があればもっと良い点数になったはず。」と話す中国出身の中学生(当時)は、たしかにその通りの性格を感じるが、同時に日本語で書かれた問題文を理解するのに時間がかかるという問題がある。

「あなたが私に日本語教えてくれる代わりに、私はあなたに中国語を教えてあげますよ。」と行ってくれる生徒もいる。

以下は、社会文化システム学科に留学している中国出身者の活動参加レポートの一部である。

K君はベトナムから来た5歳の子供です。いつもお父さんかお母さんがついてきます。いま日本の幼稚園に通っています。K君のお母さんの話によると、K君が最初にこの日本語教室に来たときは五十音図もできなかったのに、いまは簡単な日常会話ができるそうです。一回しか担当したことがないので、どのようにやっているかわからないのですが、そのときはひらがなカード、カタカナカード、反対語のカードを使ってやりました。K君はひらがながばっちり読めることに感心しました。

H君は中学校の3年生で、中国の東北から来ました。この子はとてもまじめに一生懸命勉強しています。数学、理科が得意で、英単語を覚えることは難しいそうです。この子は2回担当しました。日本語で交流できるので、日本語の勉強ではなく、ほぼ学校の宿題を一緒にやりながら、学校のことについてしゃべっています。H君のお母さんは、最初息子のことが心配でついてきましたが、ついてくるついでに自分も日本語を学習しているそうです。いつも日本人の学生が担当していますが、本人は日本語の説明がときどき十分にわからないので、教えてもらえませんかと言われて一回担当しました。H君のお母さんのまじめさに感心しました。年配の方なので、記憶力や発音はもっと大変なのに、一生懸命書いて読んで覚えるようになっています。一番印象深いことは、H君のお母さんがボランティアになりたいと言ったことです。人を手伝うことは自分も楽しいという考え方が伝わってきました。そのとき、私も反省してもっとまじめにやろうと思いました。H君のお母さんはいつも病院の言葉を学んでいます。病院に行った時、医者の話があまりよくわからなくて、自分がどこか気持ちが悪くてもうまく説明できないという悩みを持っています。その病名について説明してあげました。

SPIRITの活動で、メンバーの中で自分にしかできないことは何かというと、日本語があまりできない中国の生徒やフィリピンの生徒を教えることだと思う。そのような生徒たちは日本に来たばかりで、日本語がほぼ通じない生徒である。たとえば、春学期にRさんという中国から来た中学生がいた。ここに来たとき日本語はぜんぜんできず、五十音図から教えた。教えるとき、ほぼ中国語で説明をしながら、教材を使って教えた。日本語の文法や単語を教えるだけではなく、日本語の会話も少しずつ練習した。Rさんに3ヶ月くらい教えたが、彼女の日本語力は伸びたと思われる。フィリピンからきた生徒たちは英語が上手なので、教える時に、日本語が通じない場合には英語も少し入れると、生徒はわかりやすくなっていた。

〔表現を一部修正した。柴田記〕

7. 多言語高校進学相談会

多文化共生センター東京主催による実行委員会に参加し、年に6回ほど開かれる相談会のうち、2014年度は2回、6月22日と10月5日に東洋大学白山校舎で開催した。

6月22日 5号館1階教室にて開催。参加者は、中国（生徒28人、保護者等13人）、フィリピン（生徒4人、保護者等3人）、韓国（生徒3人、保護者等4人）、ネパール（生徒6人、保護者等5人）、ブラジル（生徒1人、保護者等1人）、タイ（生徒1人、保護者等1人）、アメリカ（生徒1人、保護者等1人）、日本（保護者等1人）、合計46家族73人、見学8人、スタッフ47人。

10月5日 2号館16階スカイホールにて開催。参加者は、中国（生徒29人 保護者等20人）、タイ（生徒4人、保護者等4人）、フィリピン（生徒4人、保護者等6人）、パキスタン（生徒1人、保護者等1人）、ネパール（生徒1人、保護者等2人）、合計72人、見学3人、メディア2人、スタッフ約30人。

2015年度は7月26日に開催。今回は通訳言語を10ヶ国語とした。参加者は93名であった。

8. 小括

SPIRIT 創設時は社会学部社会文化システム学科生が中心だったので、外国にルーツをもつ子どもたちの現状理解が主目的であった。だが、定例会はあくまでも学習支援であり、教育的配慮が強く求められる。社会学部生は、参加する児童・生徒の社会背景等について一定の専門知識を以て対処できるが、教育面では試行錯誤の繰り返しだった。4年目から教育学科生の参加が増え、その点は改善された。その半面、社会調査入門や社会調査および実習を学んだ社会学部生の相対的減少により、定例活動以外の学外調査がほとんど行われなくなったことは SPIRIT 本来の活動目的からするとやや残念な結果となった。また、学科の主要科目である社会文化体験演習と SPIRIT がうまくかみ合わず、SPIRIT をこの演習へと発展的に解消させる企図は消えた。

多文化共生センター東京が主催する多言語高校進学ガイダンスを本学で2回開催、大勢の生徒や保護者等が集まり、会場の熱気を通して、外国にルーツを持つ子どもたちの日本における厳しい状況を目の当たりにすることができた。また、これを一つの契機として、本学広報課の御協力も得て、SPIRIT がいくつかのマス・メディアの注目するところとなり、活動が広く世間に知られるようになった。もっとも、外国にルーツを持つ子どもたちがこうした活動を必要としない社会にすることが最終目的である。

末筆ながら、SPIRIT 設立以来現在に至るまでご指導ご協力いただいた、COMPASS 理事の東京大学国際センター職員原田麻里子様、同じく COMPASS 理事の飯田秀夫様を筆頭に、社会学部教務課職員、社会学部社会文化システム学科教員、さらになによりも SPIRIT 初代学生代表の住吉広太君ほか卒業生および現役学生のみなさんに、厚く御礼申し上げます。

[参考文献]

- 『外国にルーツを持つ子どもたちの学習支援プロジェクト 活動報告書』2011年度～2014年度、東洋大学社会学部社会文化システム学科、2012-2015
- アジア・太平洋人権情報センター編『アジア・太平洋人権レビュー2011 外国にルーツをもつ子どもたち 思い・制度・展望』現代人文社、2011
- 佐久間孝正『外国人の子どもの教育問題』勁草書房、2011
- 南浦涼介『外国人児童生徒のための社会科教育』明石書店、2013
- 勝元幸夫編『ぼく、いいものいっぱい 日本語で学ぶ子どもたち』子どもの未来社、2014
- 『外国にルーツのある子どもたちの高校進学に関する実態調査報告書』多文化共生センター東京、2014

Study Support for International Children by Toyo Students

Takayuki SHIBATA

SPIRIT stands for Study support Project for International children with Real Interaction at TOYO University. This paper describes SPIRIT' s activities with children from China, the Philippines, and other countries.

Keywords : Study Support, International Children, Japanese language and cultures